

第3回徳島県総合教育会議 議事録

日時：平成27年8月11日（火）10:00～11:50

場所：徳島県庁 3階 特別会議室

1 開会

（司会進行）

＜七條政策創造部長＞

皆様、おはようございます。本日はお忙しいところお集まりいただき、誠にありがとうございます。ただ今から、平成27年度第3回総合教育会議を開催いたします。本日、ご出席いただいております方々を本来ならご紹介させていただくところでございますが、時間の関係で別添名簿と配席表でのご紹介とさせていただきます。それぞれ名簿と配席表をご確認いただければと思います。

2 議事

（司会進行）

＜七條政策創造部長＞

それでは議事に移って参ります。議事につきましては飯泉知事に進行をお願いしたいと思います。なお、ご意見のある方は、ご発言の前にお手元にごございますマイクのスイッチを押してご発言くださいようお願いいたします。それでは飯泉知事よろしくをお願いいたします。

（議事進行）

＜飯泉知事＞

本日は松重委員長さんをはじめ、教育委員の皆様方、大変お忙しい中、ご出席いただきまして本当にありがとうございます。また、今日ご出席の皆さん方には、日ごろから本県教育行政の発展のために大変ご尽力をいただいているところであります。心から感謝を申し上げたいと思います。

さて、もう既に過去2回、総合教育会議を開催させていただいたところでありますが、大変活発なご論議をいただいたところであります。また現場の皆さんであるとか、徳島におられる、あるいは徳島においでになられて、そして今、徳島にいる皆さんから、様々な角度からのご意見、ご提言をいただけてきたところであります。

また、今は国、地方を挙げて「地方創生」その元年と、このように言われるところであります、やはり多くの皆さん方からのご意見も地方創生に資する人材の育成という大きな方向性もいただいたところでありますし、また総合教育会議のこの場をこうしたかたちだけではなくて「地方創生“挙県一致”協議会」の場でも各界各層、今、国の方でよく言う、産学官だけじゃ足りない、これに言労金、六位一体だと。その代表がすべて集まっていたらいいこの場でも、教育についてすべての人たちからご意見をいただいたところであります。その場では松重委員長さんもお発言をいただいたところであります。そうした意味で様々なご意見を今、集約させていただいているところで

あります。この「“挙県一致”協議会」の場で多く出たご意見というのは、徳島をもっと子どもさんたちに知っていただいて、郷土に誇りを持つんだ。そしてアイデンティティーをしっかりと持つだけではなくて、将来に向けて子どもさんたちが夢を持てる教育を行うべきじゃないだろうか。大変印象深く、私も聞かせていただいたところでもあります。是非、皆様方におかれましては、これまでのこうした状況をご理解を賜りまして、更にこれから多くのご意見をいただき、そして取りまとめていきたいと考えております。

ちなみに直前には、若者の皆さん方のご意見をいうことで、総合計画審議会の「若者クリエイト部会」の代表者の皆さん方からもご意見を伺いました。彼らからは若い世代の皆さん方が後段で申し上げた、夢を持てる、こうした教育環境を作り上げていただきたいというお話をいただいたところでもあります。

それでは本日の会議についてですが、第2回の会議に引き続きまして現場の皆様方の生の声をお聞かせいただくということ。また、これまでのご論議や様々な県民の皆様方からのご意見をしっかりと取りまとめた大綱の骨子案について、委員の皆様方と今日は十分に協議を行いたいと考えておりますので、大所高所からご提言、ご提案を賜りますようよろしくお願いを申し上げまして、これからは総合教育会議の議事を進めて参りたいと存じます。

それでは、次第にもございますように、まず「(1) 現場からの意見等について」、こちらを第2回に引き続きまして行って参りたいと存じます。本日は教育による地方創生を推進していく上で、非常に重要なポイントとなります、チェーンスクール及びデュアルスクールの取組、共に、徳島から国に対して提言をしていくものでありまして、現場でご活躍をされているお二人の方からご意見をお伺いすることといたしております。

それでは、最初に椿町中学校の曾我部教頭さんからお願いいたしたいと思っております。

(1) 現場からの意見等について

<阿南市立椿町中学校 曾我部教頭>

失礼いたします。阿南市立椿町中学校、教頭の曾我部でございます。本日は、このような機会を与えていただきありがとうございます。よろしくお願いいたします。

阿南市椿町中学校区の学校の位置と学級数、児童生徒数です。3校合わせて53名。小学校については両校とも低・中・高の2学年ごとの複式3学級。学校の小規模化、学級の少人数化による教育への影響が地域の課題となっています。

岬先端に位置する椿泊小学校までは、軽自動車がやっと入れるような、タクシーでさえ進入を拒否する狭く曲がり角の多い道です。児童数が少ないとはいえ、他校へ統合してスクールバスで児童が通うということはできず、地域に学校はどうしても必要です。そこで、本地域では2年前から、地域に分散する複数の小規模校が人的・物的資源を相互活用しながら、多様な学びを保障する「分散型小中一貫教育（チェーンスクール）徳島モデル」の研究指定を受け、学校間ネットワークの構築・強化による教育の質の保証や教育活動の活性化に取り組んできました。本年度は「確かな学力の育成」「社会性・リーダー性の育成」「ふるさとを愛する心の育成」「判断力・行動力・共助心の育成」の四つの柱を立てて取り組んでいます。

まず、「確かな学力の育成」については、定期的に合同学習を取り入れ児童生徒がより大きな集団の中で切磋琢磨しながら学び合うことで、より一層の学力向上に努めています。画像は中学校1年生と小学校低・中学年の児童が、国語の合同授業で、新聞を題材に共に学び合っている場面です。

また、小学校合同での外国語活動や算数等の合同授業では、チェーンスクール機能を生かし、中学校の英語や数学の教員が小学校に出向いて教科の専門性を生かした授業も実施しており、小学校から中学校への学習の学びの円滑な接続を図っています。

次に、「社会性・リーダー性の育成」については、小中合同体力テストを紹介します。これは以前は各校で行っていたものですが、中学校を会場として小中合同で実施するようにしたもので、異年齢の縦割り班で行動するため、中学生にとっては集団の中でリーダー性を育むいい機会となっています。また、小学生にとっても他校の同年代の児童とふれあえる貴重な機会になるとともに、中学生の姿を見て活動のモデルを知ることができるという学びの場ともなっています。さらに、小学校ではグラウンドが狭く、50メートル走の距離を確保できないというデメリットも、中学校のグラウンドを使うことで距離を確保することができ、体力テストをスムーズに行えるというメリットや、多くの教員が関わることで、児童生徒の安全面の確保が一層充実したものになるというメリットも生まれています。

次に、「ふるさとを愛する心の育成」についてです。地域にはウミガメの上陸・産卵で有名な蒲生田岬があり、地域の人々がウミガメの保護活動に取り組んでいます。そこで、保護活動に取り組んでいる地域人材を講師に招き、ウミガメの生態や保護についての学習を小中合同で実施しています。また、昨年度は小中合同で、地域のイメージソングを作成しました。歌詞の1番を椿小学校の児童、2番を椿泊小学校の児童が「地域のよいところ」をテーマに作詞し、3番の歌詞は本校の生徒が「ふるさとと自分の未来」をテーマに作詞しました。そうして完成した曲「みんなの椿町」は、合同学習や地域の行事の機会に歌い、郷土愛を深めています。

最後に、「判断力・行動力・共助心の育成」についてです。本市では、これまで繰り返し津波被害を受けています。そこで、3校の児童生徒及び教職員、地域の保護者が参加する「ふれあい防災オリエンテーリング」や、地域の人々も含めた避難訓練や防災教育を実施しています。こうした合同学習、合同行事の取組は本年度すでに6回実施しており、年間を通じて15回程度実施する計画です。

各学校単独ではできないことが、チェーンスクール機能により複数の学校が合同して取り組むことで、集団の規模が大きくなっただけでなく、活動内容にも広がりや深まりが出て、小規模校であっても多様な学びやふれあいを児童生徒は経験することができるようになっていきます。合同学習や合同授業のあと、小学生からは「他の学校の友達からいろんな意見を聞くことができ、楽しかった」、中学生からは「中学生なので小学生のお手本としてこれからもがんばりたい」という声が聞かれました。教職員の意識の中にも小中一貫した教育の視点の意識が芽生え、個々の教員が日常的に他校と情報交換の機会を設けたり、学校の教育活動について情報提供をしたりするなど、椿地区全体の教員としての視野の拡大や意識の向上が生じ、教員同士のネットワークや協働意識の構築が図られています。

また、小中一貫教育の視点に立った合同学習や合同行事が増加し、小学生が中学校を訪問しての学習や活動をする機会が飛躍的に増えたことにより、小学校から中学校への円滑な接続が図られ、中1ギャップの解消にも結びついています。さらに、学校間ネットワークの構築・強化により、それぞれの学校を支えている地域のネットワークが強化され、学校を拠点とした地域コミュニティの活性化にもつながったことも大きな成果です。

課題としては、合同学習等を実施する際の児童生徒の移動に係る時間の削減や、教員の打合せ時間の確保が挙げられます。画像をご覧ください。これは、椿町中学校と椿泊小学校の間で行われて

いる土砂崩れ対策の工事です。この工事により時間全面通行止が行われ、児童生徒の効率的な移動に、たびたび困難が生じました。こうした課題を解決するためのひとつの方策として、この秋から県による新たな予算措置によって運用を開始するテレビ会議システムがあります。このシステムにより合同授業の実施や児童生徒間の交流、教員間の協議や合同研修等がさらに充実・進展し、一層の教育効果を上げることができると考えています。

今後もチェーンスクールの取組を充実させ、経済効率性と教育多様性をさらに追求した取組を進めて参ります。以上で報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。今はまさに地方創生の中、小学校、中学校の存在ってというのは非常に大きい。それをどう存続をさせていくのか。またICTの利活用といった点。また小中一貫の大きなモデルを打ち出されてきているのではないかと考えておりますので、曾我部教頭先生、これからも是非、頑張ってくださいと思います。どうもありがとうございました。

それでは続きまして、教育戦略課の藤本班長さん、どうぞよろしくお願いいたします。

<徳島県教育戦略課 藤本班長>

失礼いたします。教育戦略課の藤本と申します。よろしくお願いたします。私の方からは今年からモデル化に向けて取組を始めました、地方と都市を結ぶ新たな学校のかたちについて説明をさせていただきます。

まず最初に、3枚の写真をご覧くださいますが、この3枚の写真に共通することを考えていただきながら見ていただきたいと思います。まず1枚目です。サーファーの方々の集合写真です。続きまして2枚目です。川の中の大きな岩の上で、パソコンとタブレットに向かっているところです。次に、3枚目です。古民家でパソコンに向かって作業をしているところになります。もうおわかりのことと思いますが、これら3枚の写真は、本県に進出しているサテライトオフィスに係する写真です。最初に申しました3枚の写真に共通する答えとしては、実は、「サテライトオフィス」ではなく、徳島に共通する「よさ」ということで考えていただけたらありがたいと思います。

企業がサテライトオフィスを置く理由というのは様々あると思いますが、本県の場合、東京にはない徳島の「よさ」に期待をしてオフィスを置くという場合が多いのではないのでしょうか。職場のすぐ近くに、サーフィンのできる海がある恵まれた自然環境、普通こういうところでは仕事をしません、川の中でも使える高速なネット環境。また、鳥や虫の声を聞きながら、ゆっくりと流れる時間の中で仕事に没頭できるという環境が徳島にはあります。一方、東京の方では、多くの人が集まることで創り出される人工的な魅力や、東京駅に代表される抜群のアクセス環境。また、多くの企業が集積しているというビジネス環境、こういう「よさ」があると思います。この徳島の「よさ」、東京の「よさ」、この両方の「よさ」を生かして、いいとこ取りをして、ビジネスの可能性を拓けていくというのがサテライトオフィスを置いている目的ではないかというふうに考えているところですが、ここで、サテライトオフィスを置く目的を取り上げさせていただいた理由については、本日のテーマを説明させていただく上で、このことが重要な考え方になるからということでご承知おきいただきたいと思います。

次のスライドをご覧ください。本県に進出しているサテライトオフィスに係する方からのお話なんですが、「私は東京のよさも徳島のよさも同時に味わっているんですが、学校の関係があるの

で、子どもにはなかなかその機会がないんです。サテライトオフィスを開設するにしても、子どもの教育の部分に対応できないと難しいところがあるので、この状態を解決できないものでしょうか。」というお話が当課に寄せられました。親の勤務に伴いまして子どもが転校するということは普通にあることなんですけれども、サテライトオフィスの場合というのは、場合によっては2週間、または1週間で本社とサテライトオフィスの方を行ったり来たりするということになりますので、それに合わせて子どもが転校を繰り返すことは、転校手続のこともありますので、なかなか現実的なものではありません。そこでちょっと考えてみたんですが、それだったら、そもそも転校という概念自体をなくしてしまう、転校手続なしで両方の学校で勉強できるようになればいいのではないかとこのことを考えてみました。

従来、「教育は1箇所で落ち着いて取り組んでいく方がいい」とか、また、「外からの子が入ってくると規律が乱れることが心配されるので、できれば遠慮したい」というふうな考え方もあるかと思いますが、そういう考え方を変えまして、地方と都市を移動することが最初から前提であるというふうな考え方の元に、いろいろと考えてみたところ、地方と都市で子どもを共に育てる「共育する」というふうな考え方、また、それぞれ違った環境で育ってきた子どもたちが混じり合うことで、感性をお互いに刺激し合って、例えば化学反応のようなことが期待できるのではないかと、また、保護者と一緒に地方で生活をすることによって、地方のよさをその生活の中で学ぶことができるということが期待できるんじゃないかというふうなところに達しました。

そこで、地方と都市を結ぶ新しい学校のかたち「デュアルスクール」というものを考えまして、昨年11月に国の方へ提言をさせていただいております。この「デュアルスクール」という名称ですが、地方と都市の双方で子どもを育てるといふ、そういう学校ということイメージして考え出したオリジナルの名称です。ここで育った子どもたちがデュアルな視点を持った、多面的な考え方できる人に育つということを期待して、そういう意味も込めました。その概要を説明させていただきますと、例えば、東京都のA区に住んでいる小学生の場合ですが、A区立小学校を本籍校としまして、サテライトオフィスのある徳島のB町立小学校、こちらの方を副籍校とします。そして、両方の教育委員会が合意をすれば、転校の手続なしに双方の学校での学習ができるようになる、そういうことを認めるということを考えています。そして、副籍校の方には、学習進度の調整などを行うための特設の学級を設置しまして、児童のフォローや両校間のコーディネートを行うような教員を配置できればと考えています。もちろん、今はこういう制度はまだ認められていませんので、これからの教育の新しいかたちとして認めてもらえるように、提言を通して国へ要望をしているところです。

この「デュアルスクール」ですが、期待している効果としては、今、県で取り組んでおります「とくしま回帰」の加速という中で、地方での教育を経験することができますので、地方での教育に不安を持っている部分がございます。そこで、それを軽減することで、地方への移住が促進されるのではないかと、また、児童がいる家庭でも地方と都市の2地域での居住、この可能性が広がってくるのではないかとこのことを期待しています。また、「次代を担う人づくり」という面から考えますと、地方と都市、それぞれの「違い」、また、「同じ」という部分に気づいて、そこからそれぞれが持っている「魅力」、また「課題」に気づいていける多面的な考え方ができる人づくりに役立つのではないかと考えております。

「徳島には何もない」という言葉をよく聞くんですけども、そういうふうな思い込み、これをなくしたり、高齢化の進行によって生じている課題というのが、これは徳島だけではなく東京でも深

刻な問題になりつつあるというようなことに「気づく力」を身につけて、その気づいた課題、これを解決していける人づくり、これが今後ますます重要になってくると考えますが、そういう人づくりにも役立っていくのではないかとというふうに期待をしています。例えば、マスコミでも取り上げられているので、ご存じの方も多いと思いますが、徳島で起業した「とくし丸」という移動スーパーがございます。これは買い物難民の対策と高齢者の見守りを兼ねた移動スーパーなんですが、東京をはじめとして多くの都府県で導入をされています。これは本県が掲げている「vs東京」、東京と対決するのではなくて、東京を救っていくという考え方、これが実現されている一つの例ではないかと思いますが、徳島では、このようなことを発想、また実現できる人づくりをしている、そういう教育に取り組んでいるんだということになれば、徳島で子どもを育ててみたいと考える保護者も出てくるのではないかと思います。このように、教育の面からこれからの地方を創っていく、地方創生へ役立っていくものとして「デュアルスクール」のモデル化に取り組んでいきたいと考えています。

最後になりますが、私は教育行政に携わらせていただいてから8年目になりますが、8年前には教育による地方創生という発想はなかったかと思えます。しかし、これから続いていきます人口減少社会では、地方創生と同じように、これまでの経験知だけでは乗り越えることができないような、そういうふうな課題がいろいろ出てくるかと思えます。そういう未知の課題に対しても、立ち向かっていけるだけのしっかりとした「生きる力」を子どもたちに身につけられるようにすることが、教育行政に携わる者としての責務であると考え、これからも取組を進めて参りたいと思っています。以上です。ありがとうございました。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。今もお話がありましたように、このデュアルスクール、まさに地方創生の大きな起爆剤。今、サテライトオフィスの実例を挙げていただいたわけではありますが、よくICT企業の皆さん方は無定量、そして24時間仕事をするというので、本人はもとより子どもさんたちあるいはご家庭にとっては大変なダメージということが言われておまして、なかなかそこで長年仕事をするのは大変だということが一定の価値観となっているところであります。しかし徳島が掲げたこのサテライトオフィスによって、まずお父さんたち、お母さんたちの働き方が変わった。そしてこれからはまさに「vs東京」ですね、こうしたご家庭の子どもさんたちも救おうではないか。子どもさんたちにとっての第2のふるさと、大自然と、まさに新しい価値観をここに見いだしていこうということでありまして、まさにこの「地方創生」、「とくしま回帰」はもとより「地方回帰」大きな起爆剤になっていくということで、さらにこの内容についてはつめていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

それでは今日は現場のお二人から大変貴重なご提言と、あるいは実態についてお話をいただいたところであります。心から感謝を申し上げます。それではお二人にはここで退室をいただければと思います。どうもありがとうございました。

それでは、続きまして、「(2) 徳島教育大綱(仮称)骨子(案)について」に移らせていただきます。内容につきましては、事務局から説明をお願いいたします。

(2) 徳島教育大綱（仮称）骨子（案）について

（事務局説明）

＜梅田総合政策課長＞

総合政策課長の梅田でございます。それではお手元にご配布の「資料2」「徳島教育大綱（仮称）骨子（案）」をご覧ください。これまで2度、開催いたしました総合教育会議におけるご意見、また「地方創生“挙県一致”協議会」において委員の皆様からいただいたご意見及びその後のアンケートによりいただいたご意見、さらに8月4日に開催いたしました若者クリエイト部会の委員の皆様からのご意見、パブリックコメントやSNSを通じ県民の皆様からいただいたご意見など、これまでにいただいたご意見、ご提言、この「資料3」から「資料7」に記載しておりますけれども、それを踏まえまして骨子案を事務局で取りまとめましたので、内容についてご説明させていただきます。

まず1ページ目をご覧ください。大綱の構成につきましては、「1 大綱の趣旨」「2 本県教育の現状と課題」「3 基本目標」「4 基本方針と重点項目」「5 推進期間」としたいと考えております。

「1 大綱の趣旨」では、この大綱が地教行法に基づくものであること、また「新未来『創造』とくしま行動計画」を基本としていることなどを記載いたします。「2 本県教育の現状と課題」につきましては、これまでにいただいたご意見を踏まえ、人口減少、超高齢化社会、情報通信技術の進展の到来など、社会情勢の変化などへの対応など5項目について記載し、「3 基本目標」において、こうした現状及び課題を踏まえまして、地方創生を成し遂げるために本県において求められる教育の基本目標として、「とくしまの未来を切り拓く、夢あふれる『人財』の育成」を掲げております。この基本目標を実現するため、「4 基本方針と重点項目」において、地方創生から日本創生へ！「徳島ならではの」教育の推進をはじめ、3つの基本方針を定め、それぞれ5つの重点項目にまとめております。「5 推進期間」は平成27年度から30年度までの4年間としております。

2ページ目をご覧ください。3つの基本方針について、その内容をご説明いたします。まず「基本方針Ⅰ 地方創生から日本創生へ！『徳島ならではの』教育の推進」では、地方創生から日本創生の礎を築く徳島ならではの教育施策を展開するという一方で、さきほどお話いただきましたチェーンスクールの取組など、人口減少社会に挑戦する「徳島モデル」の学校づくり。本物に触れる体験を重視した教育の推進など、子どもたちの可能性を最大限に伸ばす教育の推進。小中学校における職業体験の拡充など、将来を描くキャリア教育の推進など5項目を記載しております。

「基本方針Ⅱ 一人ひとりが輝く！徳島の『未来』を育む教育の推進」では、挙県一致で一人ひとりが主役になれる教育環境を整備するという一方で、多様な価値観を認め合う心の醸成など、確かな学力、豊かな心、健やかな体の育成。挙県一致協議会をはじめ、これまで多くのご意見をいただいた「とくしまを愛する心」の育成と「とくしま回帰」の促進。学校を核とした地域教育力の強化など、学校・家庭・地域が協働で取り組む教育の推進。若者が積極的に参画する主権者教育の充実など、時代の潮流を見据えた学びの推進など、5項目を記載しております。

3ページ目をご覧ください。「基本方針Ⅲ 世界へチャレンジ！『進取の気質』あふれる教育の推進」では、世界という大きな目標を持ち、その目標に向かって自ら進んで挑戦できる環境を整備するという一方で、Tokushima英語村プロジェクトの拡充など、世界に羽ばたくグローバル人材の育成。目指せ！オリンピック・選手育成事業による支援など、東京オリンピック・パラリンピックで活躍するアスリートの育成。国際科学オリンピックへのチャレンジなど、科学技術の未

語っておかなければいけないというふうに考えます。そういった大綱の趣旨、せっかく作る、今までの教育振興計画等がある上に、教育大綱を作る意味がここにあるのではないかと考えております。大綱の趣旨のところ、しっかりと私たちの希望や夢や、それから意図を語るということが大事なのではないかというふうに考えております。さきほどの説明を聞かせていただいて、意図はとても伝わってきていますし、基本方針、重点目標についても、今まで私たちが取り組んできた方向に沿ってしっかりと書かれているように思うのですが、こういった具体的な取組の中身についてはもう少し踏み込んだもの、現在の取組の内容を、これはこの項目、これはこの項目に当てはめればうまく成立するなというのではなく、もっと一步踏み込んだ取組を提案するというようなものが必要なのではないか、そんなふうに考えています。今までの取組をもっと新しい視点で考えてみるっていうこともまた大切なのでは、これからの取組が変わってくるのではないかと考えています。ちょっと最初で考えがまとまっておりませんが、こんなふうに思います。以上でございます。

<飯泉知事>

はい、ありがとうございます。今、まさにおっしゃっていただいたように、新しい教育大綱を作るということになるわけですし、これまでは地教行法で、いわゆる首長は意見を言えないという状況から大きく変えようということでもありますので、今、三牧委員さんからお話がありましたように、従来のカテゴリーにこれはここ入るね、これはここ入るね、というんでやはり迫力不足。そもそも何のために地教行法を変えたのか。そういった趣旨からいきますと、今おっしゃっていただいたように一步踏み込んだ取組、これまでのカテゴリーに入らない、そうしたものを逆に作り上げていく。その絶好のチャンスじゃないかと。もちろん従来の物を新しい見方でリニューアルしていく、これも重要なんだがという大変貴重なご提案をいただきました。そのあたり、実は「“挙県一致”協議会」の場でも言われたんですね。これは教育の問題だけじゃなくて全体の話なんですよ。これどっかみんなあるよねって。それじゃあ地方創生にならないだろうと。ましてやその一番の基軸が教育、つまり人材育成ということになりますので、さらに踏み込んだ形、今までに全くこれないね、斬新だねって。確かにデュアルスクール、チェーンスクールあるいはパッケージスクール。確かに新しい概念ではあるわけですが、是非、全面に渡ってそうした視点をお願いをしたいと思います。ありがとうございました。

それでは次に坂口委員さん、お願いいたします。

<坂口委員>

徳島教育大綱骨子案について忌憚のない意見を言わせていただきたいと思います。正直私が見た印象ではですね、既に策定されている教育振興計画の焼き直しという印象が強いです。正直、本来この徳島ならではの教育、新しい仕組みで新しいものを作るんだという根本の問題から逃げてるんじゃないかという印象がぬぐえません。仮にこのままの骨子案で大綱を策定したところで、今までの教育振興計画の策定を超えた何か新しいものとか、ムーブメントが徳島から発信されるとは全く思えません。

じゃあ、どういうことかと言いますと、こういう大綱、せっかく法律が変わって知事部局と教育委員会がしっかりタッグを組んで、県の教育を考えるとところにきているのであれば、全く新しい仕組みを作らなければいけないわけで、はっきり言ってしまえば、今の骨子案というのは各論に終始していて、まあ目につきやすい斬新なアイデアの各論の問題に終始していて、教育の在り方

であるとか、教育に対する価値観であるとか、あるいは、そうした個別のすばらしいアイデアを実現していくためのシステムであるとか、そういったものについて軽視されている。むしろこの大綱では、もう既に教育振興計画ですばらしいアイデアがいろいろ出されていて、そこにプラスアルファで知事部局の地方創生の観点から、それを肉付けしていくという部分ではすごく大事なんですけども、この総合教育会議でしかできないことっていうのは、僕はまさにこの総論部分のシステムづくりであると思っていて、むしろそれが僕は斬新だと思っています。他の県、おそらく同じような形で、何か新しいアイデアはないかっていう各論を並べたてたものが出てくるんじゃないかと思っていますけれども。

僕はむしろ独自のものを作るのであれば総論部分、具体的に言うと第1回目の総合教育会議でも述べさせていただいたんですけども、教育予算の在り方、あるいは教師が生き生きと活動できるような環境づくり、あるいは地域や団体間の連携の在り方、で、広報の在り方、こうしたことをもっともっとシステムのど真ん中を突き刺すような形で、骨太な大綱に仕上げるべきではないかと感じました。もちろん個別のアイデアを軽視しているわけではありませんし、むしろ僕はこのチェーンスクールであったり、デュアルスクールであったり、あるいは前回の議事録見させていただきましたけども、いろんな既に各地で行われている取組はいずれも本当にすばらしいもので、既に徳島ならではのものっていうのもたくさんあって、ただ教育予算であるとか、教師や大人の在り方であるとか、連携のシステムであるとか、広報であるとか、そういったところがしっかりしてなかったら、こういったものを継続的にはできないし発展性もない。であるならば、総論部分にもっと力を入れるべきではないかと。はっきり言ってしまえば、狭い教育界だけでものごとを進めていくのはやめるんだ、挙県一致のシステムを作り上げるんだという、そういう強い意思のもとに、例えば、この総合教育会議のメンバーで随時、教育振興計画であるとか、この大綱に盛り込まれた各論の具体的なアイデアがどのように進行していったら、どういう修正が必要でとかいうことを協議し合える場を作るであるとか、あるいは民間の団体と教育委員会と徳島県で協定を結んで、何かこう常に、大綱を作るためのパブリックコメントであるとかフェイスブックでの意見ではなくて、随時そういう意見が入ってこれるような仕組みを作るであるとか、あとはもっと思い切って広報・PRに関しては民間の会社に委託してしまえとか、これを公募して民間の会社からPRを作るといような形で、例えばそういうシステムを作り上げるというところに力を入れるべきかなと思います。もちろんこの骨子の中にはところどころには、そうした根本に関わる部分も盛り込まれているんですけども、並列に議論されるべきものではないところに位置付けられていることによって、それが薄められて、結局は特色が出せないというような状況になるのではないかなと思います。

最後にですね、企業再生という言葉がちょうど三牧委員からも出ましたけれども、じゃあ企業の再生をするときに何をするかといたら、真新しいアイデアで、何か人がやっていないことをいきなりやろうとするかっていたら、例えば我々が弁護士として企業再生に入ったとき何をするかといたら、そこではないですね。それはそういうアイデアを出す方たちがやってくださること。我々が何をするかというと根本部分の見直しです。一本筋の通った理念を作って、そもそも何のためにこの会社は必要なのか、どういう役割を果たしていかなきゃいけないのか、各部署、各役割の当事者からヒアリングをして、必要であれば組織変更をして、当然、予算組みの、今まで当たり前のように行われてきた予算組みを項目ごとに見直しをしていく、そういうほんとに非常に地味で地道な作業をします。その過程には、誰もが触れたくないところにも触れなければいけない場面っていうのがあって、そこに踏み込んだ内容、あるいは、それを全て表に出さなくてもいいけれども、

その過程が県民の皆さんに伝わるような形でこの骨子案ができれば、それはそれでいいかなというふうに思います。

資料7の中で、僕はいろんな会議で出された意見全て目を通させていただきましたけれども一番印象に残っているのは、フェイスブックにおける意見の上から四つ目、非常に短くて、おそらくこれは本当に県民のどなたかから生の声として出たんだろうと思うんですけども、「教育について、とても良い案が多くあると思う」って認めてくださっているんですよ。僕自身もそういうふうに思いますし、チェーンスクールやデュアルスクールの話聞いて、いやそれはおかしいだろうって言う人は誰一人いないと思います。これがたぶん県民の皆さんの意見だと思うんです。けども、県内の子どもたちにはその実感がありません。景気と一緒にですね。株価が例えば上がったとしても、景気が上がったという感覚がそれぞれにないっていうのは、その間に何かギャップがあるんじゃないかなと、システムの問題じゃないかなと思います。以上です。

<飯泉知事>

はい、ありがとうございます。ちょうど今おっしゃっていただいた最後の部分、宣伝力が足りないように感じますと、まさにそのところですね。これは今、坂口委員が言っていただいた大変重要な話として、我々、教育だけの問題じゃなくて、行政全般のことなんですね。いろんな施策、こんなことやってますあんなことやってますということを、例えば長期計画作ると。でもしよせんは昔から絵に描いた餅なんですよ。それが食べられる餅なんだ、更にはおいしく食べられるという実感がないことには芸がないというのはまさにここなんですよ。つまり今まで教育っていうのは不磨の大典というイメージがずっとあって、触るべからずみたいだね。これは教育委員会というよりも文科省から流れて各都道府県の教育委員会、市町村の教育委員会そして各学校と、こうなってくる。それが、滋賀県で起こった事件からこれやっぱりおかしいんじゃないかという話が出てきたと。それが大きな要因となって地教行法を改正をして、そろそろ首長の意見をと。でもこれはなぜかという、昔は教育現場の学校の先生のほうが住民の皆さんに近かったんですね。どちらかというと市町村長であるとか知事っていうのはなんかね、うさんくさいようなイメージもあったり、ちょっとふんぞり返ってるんじゃないかと、当選するまでは米つきバツタのようによろしくよろしくと言って、当選したら全然、なんてことも井戸端会議でお母さん方にね、揶揄をされる存在だった。だからこの人たちに教育を触らすとまずいんじゃないかっていうね、こういった点で地教行法が作られた。しかしそれが長くなるとやはり制度っていうのはだんだん疲労してくるんですよ。制度疲労をおこす。今、実は教育全体でも言われているのが三位一体なんだと。学校現場での教育、家庭教育、地域での教育。昔はそれぞれがそれぞれに力を発揮してたんですね。だから道徳は我々の小学校1年のときにはあったんですけどね、突然なくなる。それも今まで道徳は家庭でもしっかりできる、社会でもできる、支えられる。学校で教える話でもないよね、あたりまえのことじゃないってね。まあ、二宮尊徳じゃありませんけど、あの銅像が薪積んでね、それがよかったかどうかって話もあるわけなんですけど、でもそれはもう当たり前のものでした。それがだんだん高度成長になって家庭が子どもの教育に構ってられない。塾に行きなさいとか、家庭教師雇いますよとかね。そんな話になってきて、まず家庭の教育力が落ちてしまった。核家族化になったというのも大きな原因だと思うんですけどね。それから今度は地域が我関せずになった。昔は我々、もうイナゴの群れのように小さいときはブワーとどこそこの家に行ってジュース飲んだり、ケーキ食べたりとか、地域で子どもさんたちを育むというか、怒られもしましたね。ちゃんと正座して座ってなさいとか

って。道徳はちゃんと地域で教えてくれるんですよ、地域の人たちがね。ところが今、それが無い。逆にそうした注意を誰かがしようもんなら、怖い人が睨んでるから、こっち来なさいみたいなね。こうしたことで今度は地域の教育力も崩壊してしまった。我関せずになった。そうすると全部が学校に押し寄せてくる。学校の先生もたまらないわけですよ。現場の先生が疲弊しているっていうのはそこに原因がある。昔はこの3つがうまくバランスがとれていたのが、全部学校に持ってこられる。これはたまらないよと。これが一つあったのかと。これは一番教育の現場を良く見る場合の話なんですけどね。

しかしそうした中で今、坂口委員がおっしゃったように、根本的な点について、せっかく地教行法、子どもさんたちの尊い命が失われることがきっかけとなってこれは出たわけでありまして、我々としてもしっかりと今までどこに問題があったのか。確かに第1回目にあったね、例の教育費、今、徳島県の予算では一位。その予算の大半が実は人件費なんだと。こうした点についてももっともっと知っていただく。これは教育現場の人も知っていただく必要があるし、県民も知っていただく必要がある。そうすることによって学校の先生に対して見方が変わるし、学校の先生方のやる気も変わってくると。知事部局については第1回でも申し上げたように、既にゼロ予算事業というのを、教育委員会でもやっていたいっているのもあるんですけどね、要は、県職員の給与そのものが予算なんだと。そしてそれだけの知識を持っているわけなんで、彼らが行動することによって事業になるんだと。だからこうした点を考えていくと、逆に教育の前には全く違う観点で、それが展開ができていくんじゃないかと思うんですね。こうした意識を学校の先生方にも現場で持っていただくと。そういった意味では第1回目は少し耳の痛い話だったかもしれませんが、あの給与カットのときの話はね、過去の話ではありますが、申し上げた。だからそうした点でこれから今、おっしゃっていただいたように一番の課題、これは松重委員長さんもおっしゃられたように、それだけ人件費が占める、で、さきほど三牧委員さんからもお話があった、人の材料じゃないんだと、まさに財産なんだという観点はそこにも実は反映してくるんですね。だから、まさに徳島の財産、「人財」というね、学校の先生。その皆さん方にどう行動していただくか。自分たちで自ら発想して行っていただきたい。それぞれの皆さん方がそういう意識を持って教育に取り組んでいただくと、全くこれは異次元の教育改革につながる。前向きの話になり、それに触発されて地域が連携をして立ち上がっていかうと、あらゆる主体の皆さん方が教育を支えようと。それでこういったところが取り戻せてきているんですがね、まだ完全にそうになっているわけじゃない。で、最後に残るのがやっぱり家庭なんですよ。だからこの部分までどう持っていくのか。確かにおっしゃるようにそこを逃げていたらいつまでたっても学校の先生の疲弊感は変わりませんし、その予算が実際に生きてこないということがあるわけですので、そこはやはり総論の部分の中に、今の予算のあり方、これはどう変えるかというより、どういう実態なんだ、だからこれを生かそうじゃないかというね、プラスの発想に変えていく。また先生がいきいきとする、これは教育現場の話ですから、まさにそうした環境を、これはまさに三位一体を取り戻せるかどうかと。取り戻せないのであればその代替を誰がするか。これも学校の現場に任すわけにはいかない。そうした点をしっかりと思想の中に書く。これは実は私はよく知事部局の皆さん方に言うんですけど、いろんなすばらしい各論がある。政策が出てくる。ところが思想がないっていうのは私は必ず言うんですね。それは何かというと根本的な、なぜこれをやるんだというバックボーンがあり、どう解決し、プレイヤーがどういう人たちなんだと、どう動いてもらうのか。その皆さん方が最大の能力を発揮できるにはどんな環境がいるのか。それを受けてこの事業があるんですよ。やはり大胆にこれを変えていかなければ、まさに坂口委員がおっ

しゃるとおりで、今までの教育振興計画パート2焼き直し、まさにそのとおりね。文科省はそれでもいいとは言ってくれてるんだけど、それではあまりにもね。なんで地教行法を変えたんだということになるわけですので、新しい思想をしっかりと入れる。これはもちろん全く変えるということではなくて、徳島教育という名の下に過去行ってきた伝統もしっかりと守りながら、逆に今の社会に適合していくにはいったい何が必要か。そしてできれば今の社会に合うだけでは悲しい話で、未来を見据えて、これは私が今、あらゆる部局に言っている「一步先の未来」、特に徳島の場合には施策についてはいろんなところで全国のモデルになっている。さきほどのデュアルスクール、あるいはパッケージスクール、チェーンスクールこれも一例、あるいは英語村もそうなんですけどね。それはまさに坂口委員のおっしゃる一つの事業の世界なんですよ。それをどういう思想の下にこれが生まれて、どうやっていくのかということが教育現場にもまた県民の皆さんにもすべて理解をしていただければ、それぞれがそれぞれに発想するすごい社会ができあがる。だからその仕組みを考えなければいけないということで、今支えるシステムとしての例えば戦略会議みたいなものを作ったっていったらどうだろうか。既に県の長期計画はそうやってるんですね。まさに国も今、ようやくPDCAサイクルっていうことでね、やっぱりチェックのところをしっかりと行っていく。つまり毎年これは変わるんだよ。でも、思想の部分については確かにドーンとある必要があるわけですし、決して代案を新しく作ろうというわけではないわけなんですけど、是非そうした思想の部分のしっかりと打ち込んで、そしてそれに基づくかたちでどういう支えるシステムがあって、具体的な施策を作り上げていくのか。その実行をまたチェックをして新しいものに切り替えていくと。これを教育現場はもとより、社会全体、そして行政、三位一体でしっかりとこれを進めていくと。今、大変貴重な点を言っていただきましたので、この点については、担当課に全面的に改定するように今日、私の方から指示をしておきますので、確かに今、教育の現場でもこうした課題、なかなかこれは難しいということが本当に多々あるところで、学校の先生方がいきいきと、これは子どもさんたちがいきいきとするところにもつながる話ですんでね。是非、この点についてはもう一度、一からやり直していただきたいと思います。現にフェイスブックでもそうした意見が出ているわけですからね。よろしくお願いをしたいと思います。

それでは次に田村委員さんお願いいたします。

<田村委員>

はい。私も同じようなことになると思うんですけど、この骨子案は非常に地方創生の視点を網羅されていて良くできていると思います。ただ、もしこれを教員として見たときに、じゃあ私はいったい何から手を付けたらいいんだろうかなって思います。ポイントは何だろう、教育が今一番しないといけないことは何なんだろうなって思ってしまいます。

現在、子どもが悩み、多くの教員が悩んでる状況の中で、いろんなことを考えていかないといけないと思うのですが、さきほど発表のあったパッケージスクールとかチェーンスクールは、私これ、とてもいいなあと思ってます。これを今、子どもの数が少なくなっている地域だけでなく、全体に広げていいんじゃないかなというふうに思ってます。地域と共にある学校、知事さんがお話しされたことが実現に向かえば非常にいいなあと思います。昔、地域が子どもを育てていた時代に、現在の教育がもう一度うまく切り替わっていけば、教育が変わり、人間が変わっていけば、人々が幸せになれる気がします。

それで、どういう制度を作っていくかはこれから考えていくことで、大変にはなると思うんです

が、学校の先生方の活力はすばらしいものがあると思っています。前回のこの会議で私は身にしみましたし、この先生方が考えられているアイデアや計画が、実際にスムーズに実現できるような仕組みを早く作ってほしいなと思いました。そして、「今、教育が変わっているよ」というのを親御さんたちや地域、社会の全ての人たちに向けて発信するっていうか広報していくために、いったいどういう手段があるのかなと私なりに考えたいと思います。教育関係については、伝えただけではダメです。それを実体験として、「ああ、こうなんだな」というふうに十分理解するまでは結構時間がかかると思います。地域には様々な活動団体があります。婦人会とか、地域の小さな集まりの集団とか、そういうところに、「教育は地域が支えていくんですよ」「子どもは地域が支えていくんですよ」というような内容の触れ込みとかの活動をやっていく必要があるのではないのでしょうか。そういうことができるようにまず進めていく。学校の先生たちだけが変わっても、それから学校だけが変わっても子どもが幸せになることは絶対無理です。まず、私は、学校よりも親や地域だと思うんですね。だから、地域の人たちにどういうふうに知ってもらおうか、分かってもらおうかっていうところに力を入れた方がいいような気がします。この骨子案の中には十分地方創生が入ってますので、これも含めて、「こんなふうに子どもを育てていくんですよ」というようなことを、十分に分かってもらえるように広報していく。それはペーパーだけじゃなくて実践していく。エネルギーを持ってやっていると、人の心は変わっていきます。

あと、学校がどんどん外に出てほしいと私は常に思っていて、徳島には、神山や上勝のように全国に知られている地域があります。また、日亜化学工業、大塚製薬など日本の代表として頑張っている企業がたくさんあります。それから南部の方にもちょっと面白い企業もできてますし、都会と東京を繋いでどんどん新しいことをやっている企業さんが徳島に増えてきましたよね。そういう現実をたぶん知らない人が多いと思います。「これからは未来に向かって、こんなことができるんだよ」「考え方もこんなに多様化してるんですよ、今は」というのを、もっと地域の方々に教えてあげたい。じゃあ、教えるためにどうするんだっていうところに来るんですが、もっと積極的にアプローチしていかないと、動いていかないとダメだなと思います。徳島で新しい動きでもって頑張っている地域や人たちが皆が知るためには、どうすればいいのかっていうところが大切です。

それから、チェーンスクールで、私いいなと思ったのは、教科の専門性ですよ。小学生っていうのは、ほんとにすごく柔軟に受け入れるところがあるんですね。だから、教科については担任の先生に任せるのではなくて、それぞれ全て専門の先生が楽しい教え方を、自分の専門を大いに発揮して教えることができれば全てに効果的で最高だと思います。子ども自身も早い段階で、自分が何が得意なのか、何が面白いと思ひ、ずっと努力できるのかを分かってくると思うんですね。良いか悪いかは別にして、今はほんとに子どもの未来を早期に決定して勝負させてしまう時代です。そうなるともう小学校が勝負です。小学校、中学校がほんとに大事な時期になります。その前に幼稚園、保育所があるんですが、幼児期の自由な遊び、主体的な行動をする時期の子どもへの見極めが大事になります。また、今、中学生は非常に悩んでいます。多感な時期で、多くの子が友人関係に悩んでいます。その子たちがほんとに力を抜いて、自分の心を解放して多くの人と関わり合えるような空気づくりを、家庭、地域、学校でやらないといけないと思います。チェーンスクールの理想がそのまま現実になっていけば、皆さんが子どもたちの良き理解者になっていけば、非常にいい形だなんて思います。

最後に、やっぱりICTですね。情報通信技術を持っていないとどんどん遅れてしまう世の中になりました。今後ますます加速されると思いますので、ICTは早めに指導し、ICTを使った教

育をどんどん導入していかないといけないということは、目に見えて分かっていることです。あと、人と触れ合うことです。人と触れ合うことが楽しい、面白いっていうことを体感していく。そういうことも、幼児期や小学生くらいからやっていかないといけないですね。ちょっとあっちこっちと発言にまとまりがなくなりましたが、弾力的な学校の運営の体制が、これからは必要になってくると思います。以上です。

<飯泉知事>

はい、ありがとうございました。田村委員さんからも大変重要な意見をいただきました。地域全体で子どもを育てる。これをどうやって具現化していくのか。実はこの話ってというのは今、一番タイムリーというか一番ホットな話題なんですね。今、保育園、幼稚園一体となってという話が出ました。従来は保育所ってというのはあくまでも保育に欠けた子に対して面倒をみる。あくまで教育的な視点はあまり入れない。逆に幼稚園ってというのはそうではなくて、幼児教育。全体を幼児教育とはするんですけどね、大分垣根がある。しかしこれをドラスティックに変えるのがこの4月からということなんですよ。つまり子ども・子育て支援新制度がいよいよスタートをして、保育所、あるいは幼稚園、その一体的な認定こども園ができて、これら3つがそれぞれ一つの方向を見てやっていこうではないか。まさにそこは今、地域の教育に欠けている、地域で支えるといった点。つまり子ども、子育てなんですよ、教育も含めて。今、新しい支援制度ができてみんな手探り状態なんですよ。地域が支えるというたとえば放課後児童クラブとかね。こうしたところもあるんですが、なかなか予算がという話が出てきてなかなか少ないんです。でも手間はかけてくれている。そうしたところは気づきがだいぶ起きてきているところですので、ここはやはり具体的に新しく地域で子どもをどう育み、そして教育をするのか。ここがポイントになる。教育をどうしていくのか。昔は社会勉強はほとんど地域で学んでいたと思うんですよ。学校でそうしたものは教わらなかった。そういった点を今の社会にどうよみがえらせるのか。治安が少し昔とは違っているというのもあるんですけどね。そうした点についてもこれから盛り込んでいければと思います。

それともう一つ、子どもの適性を早い段階で見抜く。実はこれ、オリンピックが近づくとき必ずこの話が出るんですね。例えばかつてのソ連、東ヨーロッパの諸国、アメリカ、今は中国もそうですね。こうしたところってというのはもう子どもの適性を、大勢スクールなんかを集めて、これももう3歳とか4歳の股関節の動き方まで全部見て、この子は陸上競技とかがって分けるんですよ。でも日本人とするとすぐそうすると国家的に子どもの将来を決めるのかとって必ずこれは反対の意見が出てくるんですね。つまりみんな平等にあらゆる機会を均等に与えるべきだと。実は私が知事になってスポーツ、つまり国体の体育協会の会長もやっていますので、国体でビリばかりじゃないかという意見がある中で、じゃあもっとね、早い段階からそうしたスポーツに慣れ親しんで、競技力をつけていかないといけない。確かに小学校とか中学校で全国大会で優勝するんですよ、徳島の子は。ところがそこで目立つが故に、高校で受け皿が今までなかった。だから全部県外の高校に持っていかれちゃった。でも、若いので生活がなかなか十分にできなかったとかで潰れるお子さんも結構いるんですよ。だから、じゃあ高校でということ、最初に作ったのがスポーツ指定校制度。しかしこれも県内の対話や集会の中で知事は教育の平等が分かってない、やっぱり平等であるべきだと。でもそれって結果、悪平等になりませんか。やりたくない子もやらさなきゃなんないわけだから。やっぱりやりたい子がまずやればいいわけだし、あるいは適性のある子をより育てていく。勉強の世界ってそうなるわけですよ。私は幼稚園とか小学校の低学年のときに塾は行ってません

でしたけどね。でも今、そうなってるじゃないですか。でもはたしてそれ本当にいいのか。猫も杓子もみんな有名塾に行くための塾に行って、そして有名塾に行って、そして結局伸び悩んで、違う方向に走っちゃう。でもその子がもしスポーツをやっていたら、芸術文化をやっていたら、ひょっとしたらそれぞれの世界で花開いたのかもしれないんですけどね。なんか日本ていうのは昔はいろんな価値観を認めたのが、なんか全体主義的になってね。みんな学校でいい点とる、テストでいい点とるのがいいと。そのあたりを今、大きく変えていかないとこの国の将来はない。まさにそうしたところにも差し掛かっていると思いますので、今おっしゃっていただいた子どもさんたちの適性を早く見抜く。もちろんその中に子どもさんの意欲っていうかね、これは作ってあげないと無理無理あなたはこれに向いているからやりなさいと言ってくるとね、かつてのソ連とか東欧のようになってしまう。また我々が発達障がい、みなと高等学園もそう、あるいは特別支援学校、ここに力を入れているのは、まず彼らの適性を早く見い出して、従来の教育、福祉そして医療という三位ではなくて、これに自立という、やはり親御さんたちはそこが一番心配されている部分があるので、就労を入れようという観点で新しいものを作る。こちらは逆にみなさんがそうすべきだと言っていただけで、スムーズにね。スポーツ、芸術、あるいは勉強、こうしたものをどう早い段階で適性を見抜き、そしてそれを子どもさんたちも親御さんも、あるいは社会もWinWinの関係になれるものをどう作るのか。こうした点は今すぐに解を求めるのは難しいのかもしれませんが、坂口委員が言っていた思想としてそうしたものをに入れていくんだ、入れるべきではないかという大きな課題の一つだと思います。また是非、こうした点についてもこれから議論を深めていければと思います。

それでは、西委員さんよろしくお願いたします。

<西委員>

はい、よろしくお願いたします。坂口さんの方からも忌憚のない意見が出ましたけど、私の方はちょっと切り口が違うと思います。ちょっとご報告したい、うれしいニュースがあります。それはですね、9月末に、うちの紹介ビデオが発売されます。これは企業の研修に使われるようなビデオなんですけどね、社内の撮影や取材については、2週間にわたってされました。で、どんなことを取材したか僕全然わからないんですけども、おそらく今年入ったばかりの、みなと高校を出た人が、うちの社員さんなんですけど、一生懸命仕事をしている彼と、それを支えているメンバーの人だとかも、かなり露出されると思うんですよね。そのビデオの販売というか、発売講演がですね、10月に行われるんですけども、私も登壇してもちろん講演をするんですけども、一緒に、一昨年ですね、まだ科学技術高校出たばかりの若い20歳の男の子も登壇するんですよね。非常にその現場、高校を卒業したばかりの男の子たちとか女の子たちが、まさに生身の人間でうちの会社に入ってきてくれて、そういった活躍をしてくれている。私は非常に嬉しいんですけども、ただ、元の根っこの部分をどうやって作っていくかがコアな部分だと思うんです。

うちの会社を別に宣伝しているわけじゃないんですけども、入社して、新入社員も中途社員も半年です、自分の未来図を描いてもらいます。ミッションステイトメント、何が入っているかといったら、自分の幸福感、ミッション、自分の役割、そして信条、最後は死ぬまでにしたい30のこと。これの要約版をA4、1枚に書いてもらいます。で、これが社長に通らなかつたら正社員になれない。みんな書けるんです。なぜか。周りが一生懸命に手伝うから。30回、40回書き直す人もいらっしゃるんです。でもやっぱり周りがね、いろんな助言したりだとか、「その書き方じゃないよ」と

かいったことで、必死になって周りが助け合っただね。「お、これすごいこと書けてるな」「実は社長、30回ぐらい書き直してますよ」「反対にすごいね、素晴らしいことだね」と言っていたりするんですけど。

この教育大綱、3番の基本目標、ここなんですよね。おそらく松重さんからあと同じような話が出るかもしれませんが、「とくしまの未来を切り拓く、夢あふれる「人財」の育成」。具体的にどういう人なんです。うちの会社は半年かかって、どういう人になりたいかっていう自分のありたい姿を書いてもらうんですよね。これがちょっとね、一番ほんとに大切なところがぼやけてしまっているんじゃないかと。で、いっぱいこれメニューがあります。期待するメニューも、特に、自分としては森林クリエイト科というのはね、徳島の強みを生かした素晴らしいことになるんじゃないかなと。で、その先なんです。そこを卒業してどういう人になるかっていうのが一番大切な部分で、やっぱり、夢見ることが大切で、その夢を実現することがほんとに大切だと思うんです。で、こうやって見ていくと、全部、なんか点と点ばかりだと、メニューが。このメニューはいいと思うんですけど、それをきれいな線に、1本筋バツと立てたきれいな線にすることが、今後やってほしいことですね。

例えば、じゃあ、グローバル人材ってどういうことでしょうか。英語しゃべれるのがグローバルですか。違いますよね。去年、私も英語村プロジェクトに参加させていたたきましたけども、非常にいい雰囲気、でも雰囲気で終わらせちゃダメなんです。オリンピック出ることがグローバルですか。全国大会に出ることがグローバルですか。ではないんです。グローバルって何ですか。うちの会社はものづくりやっています。大塚さんとか日亜さんと同じように、ものづくりやったら世界に通じるものを作らないと、もう明日はない。これはサービス業も同じだと思うんです。日本でポチポチものづくりやっている、サービス業をやっている、通用できる世の中では既になくなってしまったんで。ギリシャで何か起こったら僕らの生活にも影響するくらいの世の中はグローバルになってきているので、やっぱりグローバル人材を育成しないといけないんですけど、じゃあ、どういうことですか。グローバル人材とはどういうことですか。やはり、世界に通用するような技を作る、ものづくりで言えば、技を作る。技だけじゃダメです。やっぱり、心・技・体、一体でないとダメです。じゃあ、どういふ心でその仕事に臨むんですか。やっぱりあの人のために尽くしたいとか、こういう貢献がしたいというところがあって、そういうまず思いですよとか、絶対あきらめない心ですよとか、動じない心ですよとか、いうのが世界で通用するようなものですよ、といったものを突き詰めて、ほんとにグローバル人材で技を極めましょう、という、心も体も大切だよ、不健康なままだったらグローバル人材できないですよ。ほんとにじゃあ、そこ一つを極めていこうとしたら、全部繋がっちゃうんです。

うちの会社の場合で言うと、やはり、絶対ものづくりは徳島から出さないというのが、私個人の使命でもあるし、出さないというか、徳島にもものづくりを残していくと。規模だけを追求すれば、あっという間に3倍、4倍、5倍、10倍くらいのものづくりの会社にできます。それはタイに工場を出す、インドネシアに工場を出す、中国に工場を出すというやり方をすれば。それは、さきほどもいろいろ意見ありましたが、やっぱり地域なんです。この地域が賑やかにならない限り、タイとか中国に工場出すつもりはまずないぞと。50年後、100年後はわからないけども、まず、ここをもっと活性化させるんだぞという使命感ですよ。そのためにやっぱりグローバル人材を育てる。そこらへん突き詰めていけば、全部「とくしま回帰」の促進だとか、そうところにも繋がっていくし、いっぱいいろんなことを散りばめていくんじゃないかと、二つ、三つ、四つの柱をしっかりと

り作ってですね、そこをどんどん極めていけばですね、いろんなメニューがストーンと一気通貫と思うんですよ。そしたら余計、現場でやられている先生も、すごくやりがいとかね、そういったものがあると思うんですよ。一つ一つのメニュー、もし達成率100パーセントとしたところで、じゃあ最終的にどういう生徒がどういうふうになったの、5年後どうなってるの、卒業した生徒が。一番大切なのは、やっぱり育てた生徒が5年後、10年後、20年後どうなっているのか、というところが大切だと思うんです。そこまで見て、そこまでの成果を思いながらやっていけば、もっともっと散りばめた一つ一つの点が線になっていくんじゃないかなという気がします。そんなに難しいことではないと思うんです。このメニューをどうにか見直してくださいと私は言ってないので。もうちょっと調整したら線になると思うんで。その方が、現場の先生もやりがいを持てる。以上です。

<飯泉知事>

はい、ありがとうございます。さすがは日本に残したい企業ナンバー1ですね。今のお話は坂口委員さんあるいは田村委員さんからも言われた点と全く一緒なんですよね。つまり全体に一本筋を通す。その一番の原点、これがさっきから申し上げている思想の点なんですよね。これは宗教などの思想という意味じゃなくて、どういったものに向かって行くのか。これはそれぞれによって呼び方が違うんですけどね。企業だったら企業像であるとか、あるいは個人としてどういう将来像を描いていくのか、こうした点の思想の部分がやっぱり欠けている。つまりもう一步言うと、それぞれの施策が点という話が今出たんですが、非常にエッジが効いてきてるからなんですよね。エッジが効いてきているものをどう束ねてやっていくのか。それぞれが絵に描いた餅じゃなくて食べられる餅にするときには思想がないと動けない。そしてそれに対してのミッションをしっかりと理解をしてパッションを持ってやっていけるのか。よくミッション、パッションという話はあるんですよね。バラバラにみんなが走ってしまったら意味がないんで、どういうものなのか、おぼろげでもいいからそれが分かることが思想の提示なんですよね。それに対して具体的にあなたは、あるいはこの部署はこういった方向でこれをやるべきだ、これはミッションですね。それに対して情熱を持ってやるからパッションなんですよね。だからその情熱を持てるのか、そのためには例えば会社に入ったら自分はその会社に対してどういう将来像を描いていくのか。自分の夢は一体なんなんだと。この仕事を通じて何を実現するのか。ここはもう取りも直さずパッションをどうやって生み出していくかということなんです。これを是非、教育現場にあてはめていただきたい。点を線にそれから面にもっていく。それを立体の三次元にして、最後におっしゃっていただいた、その子どもさんたちがどう5年後、10年後、つまり時間軸を入れると四次元なんですよね。私がよくこれから「一歩先の未来」は四次元で考えないとダメだよというのは、今、西委員さんが解説をしていただいたそこなんです。このあたりを分かりやすく解き明かしていただきましたので、しっかりとこの中でどう取り込むことができるのかを考えていただきたい。まさに皆さん方にとっては、教育大綱、どうパッションを持ってやっていけるのか。このあたりをこれから今、問われたことと考えていただければと思います。

それでは、佐野教育長さんお願いいたします。

<佐野教育長>

教育予算の話ですが、実は、今年の4月に校長会でお願いしたことは、コスト意識を持ってくださいと。あなたが経営するというか運営する学校で1年間にどのくらいの税金がかかっていますか

と。これは人件費も、あるいは光熱水費がいくらかかっていますか、それを考えてくださいと。それを自分で認識をされて、事務長さんとよく話をし、そして、例えば1千万、1千2百万、光熱水費にかかっているけれども、これを10パーセント節約しましょう。そうすると、そのお金が違うことに使えますという具体的な話をしてくださいと。8百数十億の県の予算がかかっているし、全体の中に占めるパーセンテージでいうと18パーセントから19パーセント、そういうことをお願いをしました。これについては各校とも今、検討いただいているという話を聞いてます。そういった形で予算の話。それから、知事が第1回目の総合教育会議でおっしゃった、教員の給与が予算そのものだというので、コスト意識を持つと、それを、動くことで自分の使命を果たせるということについてはできるんじゃないかという話をし、そして、そういった中でコスト意識をそれぞれ教員の人に、生徒一人当たりどのくらいの税金がかかっているかということを生徒にも伝えてくださいという話をしています。だいたい年間に一人当たり100万円ほどかかるという話がありますが、それを伝えるべきで、伝えてくださいという話をしています。そういうところからコスト意識、教育が変わっていくかなと思ってます。

それから、広報という意味で、例えば、皆さんあまりご存じないかもしれませんが、一昨年、海部高校から東京大学に一人行ってますし、医学部医学科に2名行ってます。塾もないし、それから学力差も大きい、一つしか地域に学校がありませんから。そういう中でも教育効果を出しているということを広報できてないし、また、名西高校で、これも2年前になると思うんですが、浪人はしましたけれども東京芸大に一人行ってます。けどこれも広報できてない。そういった意味で、学校が取り組んでいる諸々のこと、そのことに対して情報発信をすることが責務だと思っていないところに問題があると思っています。税金を使って教育活動をしたときに、その成果が上がったこと、あるいは上がらなかったことも含めて説明責任ということが、今までできてなかったということは大きな一つの問題だと思っていますし、そこの在り方を変えるべく、教育大綱の中に書き込んでいかなければならないし、それが責務ということも、教職員としてその自覚をしなければならぬし、そうしたことを書き込むべきだと考えております。

また、この資料の中にいろいろありましたが、ずっと読むと徳島の良さを教育の中で教えていないということがありまして、それはその通りだと思ってます。いわゆる教育課程の中で決められたものを教えるということに集中するあまり、授業の中で徳島の良さというものを、組み立てる授業の中でできるわけですけども、それをどこかに置き忘れたままで教育をしたんじゃないか、で、地方創生に目を向けて、前にもお話しさせていただきましたが、実は、徳島の出身でない方に徳島の良さを教えてもらうということ、そういうものがあります。その気づきというものは、やはり素直に受けてそれをやるべきだと思うし、あるいは県外に行って徳島の良さを知った、それについても歓迎する、そういうふうなことがあるんじゃないかと思っています。

あと、アドミッションポリシーといいますか、育てたい人間像あるいは生徒像というものを、もう少し各学校で前面に打ち出していくと同時に、じゃあ、徳島県全体でどういう人間を育てたいかという意味合いのこともそこには書き込んでいくのかなと思っています。それと同時に、ここに書いてあることで、いわゆる高等学校までの大綱ということになるかと思えます、所管上。しかし、高校までで教育は完結しないということで、それは入口の部分であるかもしれないし、あるいは逆に、ほとんど完結しているということかもしれませんけども、両方の考え方の中で、やはり先を見通した、そしてこれまでのところはきっちり教えて育てていく。

これは大綱と少し離れるかもしれませんが、教員は、どうしても自分の幼いとき、若いときのこ

とを忘れがちになって、大人の立場で物事を教えてしまう。例えば18歳のときに、まだ高校2年生、3年生のときに、具体的に将来が決まってないと、全然ダメだよと、本来教員自らが高校生ときできていないことを全く忘れてしまって、それを要望しているところがあると思うんですね。そういった生徒の前に立つ教職員の振り返りというか自覚というか、そういうものもやはり自分たちでやらなきゃいけないのかなと思っております。

それから、坂口委員がおっしゃいましたけども、随時の意見のチェック、意見を述べてチェックをしながら修正をしていくという観点。また、西委員のおっしゃいました、要は人間力といいますか、そういうものが教育を収斂していくんではないかというお話がありました。そういったものの学校の中の授業だけでは育たない部分、例えば、昨日、教育行政点検評価の委員さんから話があったのですが、実は学校の授業以外の学校の集団の生活の中で、それが部活動であったり、清掃の時間であったり、ホームルームの時間であったり、あるいは、たわいのない会話の中で育つという、そういう部分の教育についても価値がそこにあるという意見がありました。長らく教員として自分が携わってきた中で、この教育大綱の案を見たときに、網羅的によくできているなと思っていました。ただ、それを実行するときに、さきほどありました点から線、線から面へという、そういうふうなものについて、私ども教員の立場において、学校の立場において、社会に対してそれを説明できるか、また、それを実行できるかということが大きな課題だと考えております。

<飯泉知事>

はい、ありがとうございます。今、佐野教育長さんが言っていたいたどんな子どもさんに育てていきたいのか、育てるのかといったあたりですね、これはまさに思想に当たる部分なんですよ。ただ「グローバル人材を」とか言うと血の通わないかたちになりますので、徳島ではこうした子どもたちを育みたいんだという将来像、こうした点についても入れていくと分かりやすいんじゃないかと思えますね。それから奇しくも今、教員は自分が子どもの時のことを忘れ去っているという話がありますよね。先般、若者クリエイト部会の皆さんと意見交換会をやった時に、ある委員さんからこれが出たんですね。つまり自分はアナウンサーになりたい。でも高校の先生が進路指導でアナウンサーになるんだったら文学部に行かないといけなと。で、偏差値的にその文学部が危なかったら次の文学部にと。私は違うんだと。アナウンサーになっていくにはやっぱり学歴っているんだと。大学の名前がいるんだと。だからその大学の横横で文学部がダメだったらこの学部、ここがダメだったらこの学部と。でも絶対理解してくれないと。そういう話が出たところなんですけど、子どもの時の気持ちを忘れて、教師なんだっていうことで、後学で学んだ教師像に近づこうとしすぎる。もちろんそれは立派なことなんですけどね。それが取りも直さず生の声として今回出されているように、価値観を押しつけちゃうんですね。私の場合は、先生が私に価値観を押しつけることはなかったんですけど、私の価値観を先生に押しつけていたのも逆にあるんですけどね。迷惑な話だったとは思いますが。そこのところはね、個人、個としてしっかりどうしてそう思うのっていうひと言をきいてあげる余裕が出るか出ないかっていうことで教育の現場も大分変わるんじゃないですかね。確かに時間に追われているんで、結論を急ぐ場合が多いですよ。でも子どもって確かにふわふわしてるんですけど、いろいろ悩んでるんで、その解を導き出してあげるヒントを出してあげると、あとは先生も忙しいのだけれど、自分でまた考えて、先生、昨日言ってもらったのこう考えるんだけどって言ったときに、具体的な選択肢を、これいいんじゃないのって、でもここはちょっとデメリットあるかもしれないからここを気をつけたらとか、それでよく考えてごらんとかね。

そういったところがやっぱり抜けてるんじゃないかなあと。それは現場が忙しすぎるってことも確かにあるなとは思いますが、やっぱり子どもの時の思いっていうものをもう一度純真に、小学校なら小学校、中学校なら中学校、高校なら高校ね。そうしたことを思い返して自分はどうだったかなあと。同じ人間同士ですから同じあい路にはまり込みますんでね。そうしたところはちょっと足りないんじゃないかなあと。そうした意見がストレートに出されましたんでね。こうした点もお考えをいただけたらと思います。チェックについてはしっかりとそういった機関を位置付けたいと思います。

それではお待たせしました。松重委員長さん、よろしくお願いします。

<松重委員長>

まず、この教育大綱の位置付けですね。さきほどの話もあったんですけど、いわゆる教育振興計画とは違う立場のものを打ち出してほしい。それには、思想という話。ここで書かれているのは、小学生、中学生、高校生を対象にして社会が望む、行政が望む、そういう姿勢だと思うんですね。我々教育委員の立場として、本来、人間としてどうなってほしいか、どうあるべきか、教育の在り方やいかに人を育てるかという視点が必要ではないか、というところを押さえた上で大綱は書くべきでないか。だからまず、そういう重要性や位置付けをまず認識した上で、今回の草案で書かれている具体的なところに落としていく、そういったような連带的構成と位置付けと、さきほど坂口委員が言われたように、予算とか、システムであるとか、そのあたりについても本当は考えないといけない。その意識はこの大綱にも入れてほしいなど。

それから、さきほどの意見で小学校、中学校、高校、それも点ないしは線なんですけど、知事が言われたように私も、時間軸もあるし、それからそれを超えたところもある。つまり、幼児や生涯教育という立場ももちろんあるんですね。そういったものがないと地域との連携っていうのはない。

それからもう一つ、地域と学校との関係はですね、例えば京都の例を挙げると、明治維新のときに京都の人口は30万から20万人くらい落ちたんですね。宮廷が東京の方に移りましたんで、京都の人口が3分の2になった。これはまさに現在、地方創生の中の課題の人口減少と同じようなことが起こっていたんですね。そこで京都の人が考えたのは、明治の初期ですが、自分たちで地域コミュニティの中で教育、人を育てるという意識で小学校を作っていたんです。地元の人が、自分たちの子どもたちは自分たちで育てると、まあ、そういうふうな思想だったと思うんですね。だから、行政、我々が地域としてこうあるべきだということじゃなくて、本当は地域の人がこうあってほしいという形でコミュニティを作り、それから小学校、教育をどうする、そういうふうなところまでの意識と行動とならないと本当の地方創生にならないんじゃないかと。だからあくまで行政として望むというのはもちろん、それは施策としてはあるんですけど、やはり思想としてはそういう深いところまで考えた形でやっていかないといけないのかなと思います。いわゆる行政での対応策じゃなくて、むしろそれを誘導するというか。

それから教育というのは、多面性、多様性ありますので、ここで考える、我々があってほしいというのがそれが全てではないんですね、だから、施策のほとんどは教育の推進という基本政策の中に既にあるんですけど、そのやるべきことは未だその他にもあるし、時代、社会情勢によっても変化していく多様性があるということも認識しておかねばと思うんですね。

それから、行動、取組は必ずしも全部成功というのはないんですね。失敗もします。子どもたちでもいろんな失敗します。それに対してどういう対応をするかということも考えないと、本当に

基本的教育ではないかと思えます。やはり一方通行ではなくて、双方向でもあるし、行ったり来たり、それからくじけるときもある、それでいても、それを支える徳島という地域とがあるし、非常に基本的なね、人間的な徳島だから、そこに是非来たいというような仕組みづくりを考えていくことかなと思えます。

今日の最初の方のチェーンスクール、デュアルスクールについてですが、まず、チェーンスクールについてはある程度できることを、デュアルスクールについては政策提言を是非やっていただきたいと思えますけど。小学校や中学校を卒業するには、いろんな要件あると思えますね。大学だったら、少なくとも決められた単位を取るとか。この場合だと、ある期間だけ在籍するんですけど、それでも卒業ができるような仕組みを作るといのは、これは徳島だけでなく日本のためであると思えますね。そういった面では、まさに今、教育再生の課題は国としても安倍政権の大きな政策の中ですから、やはりそういったものも具体的に提言していくことが重要なかなと思えます。

それから、ちょっと細かいところで、さきほどのグローバルもそうですね。グローバルというか、グローバルですね。自分のこと、それから地域のこと、これが語れないと世界に通用しない。それよりも以上に自分というものを持っていないといけないというわけですから、そういう視点はキャリア教育でも重要だと思います。今キャリア教育では、狭い意味で言うと、確実にいい就職ができるということですけど、よく言われるように、これからの10年、15年の中でいわゆる職業がものすごく変わるわけですね。だから、いかに社会状況が変化しても生きていけるようなキャリア教育を、小学校、中学校、大学もそうなんですけど、やっていかなければいけない。つまり世の中が変わっても自分は生きていける、世の中に貢献できる、そういう意味でのキャリア教育です。それから、就職といっても既存の会社に就職するだけじゃなくて、やはり自分が事を起こす起業、これも大事だし、それから女性の視点ですね、それに対する教育というものもあるかなと。いろいろたくさんあるんですけど、やはり基本的なところ、まあ人の成長であるとか、それを育み、支援するのに行政としてこういう施策に取り組みたい、そういう位置付けを是非考えてほしい。

<飯泉知事>

はい、ありがとうございました。松重委員長さんからはとりまとめのような感じでね。大分これで事務局の方も思想という意味が分かってきたんじゃないかと思うんですね。つまり、行政としての対応策、ここに並べられているのはまさにそういうことなんです。最先端の対応策であると思えますけど、そういった施策を現場からでもどこからでも導き出せる根源、それが思想ということですね。野球に例えると何も三番四番五番ばかりがヒーローじゃなくてね、一番から九番までどこからでも打てる。こうしたものが、それはチーム全体の思想が決まっているからですね。なんで池田高校が昔、蔦監督で強かったかという、蔦思想が伝わったから。それが伝わらなくなって、個なんですよとか、チームワークですよとかね、一見、耳触りはいいのかもしれないけど、じゃあ結果どうなったんのか。こうした点についても皆さん方も大分分かってきていただけたんじゃないかと。もっと言うと、私が知事就任依頼ずっと言ってきたことなんだけどね。なかなか分かってくれないんだよね。ようやく皆さん方、教育委員さんたちの言葉を借りて。私がある事業があったときにこの思想はなんなのってきいたときに、「・・・」ってなるね。まさにこれね。このところをもっともっとしっかりと。今日は各委員さんたちから本当に分かりやすく具体的な事例としておっしゃっていただきましたので、それをしっかりと書いていくべきじゃないかと思えます。

それでは、その点で委員長さんからも何点か出ました。今の日本、特に公務員の社会にこびりつ

いている、失敗を恐れる。減点主義。これは常にもうやめようと言いつけてきたんですね。一番出世は何もしないで何も起こらなかった人。二番出世はいろんなことをやって全部成功した人。三番出世は何にもやらなかったんだけど、運悪く臭い物に蓋をしたものが破裂した人。四番目、いろいろやって失敗した人ね。これではいかん。やっぱりいろいろ失敗したんだけど、でも失敗から導き出すものは多々あるわけで、何もしなければ何にも新しいものは出てこない。失敗を恐れないっていうのはやっぱり子どもさんのうちからもっともっと教えてあげると、リターンマッチができるようになる。そうしないと、今おっしゃっていただいた、キャリア教育もそうだし、あるいは起業ができなくなる。チャレンジができなくなってしまう。常に失敗を恐れてもう安定ばかりね。寄れば大樹の陰なんて言葉がかつて言われたように。それじゃあ難しい。どんどん世の中変わるんで、今言っていたいただいたキャリア教育ですね。この間も私学の四国ブロック大会で言った言葉はね、今例えば短大、大学を出た後に、これ普通科の場合ですよ、その後に専門学校、各種学校に行って学んでようやく企業に入れる。これが当たり前になってきてる。ところがキャリア教育をやってる場合はずっと行けるわけね。だからこのところをもっともっと考える。ダーウィンの進化論も一緒ね。強い者が生き残るんじゃないんですよ。環境に順応性が高い、環境の変化に対応ができる、そうした力を持たせてあげるということも重要。これはグローバルなんてまさにこういうことね。昔は日本、蛸壺で、日本の中に居ればよかったわけですけど、今やそういう時代ではないと西委員さんからもお話があったわけですね。でも、その中でも守るべきは一体何なんだ。思想は何なんだ。ミッションは何だと。こうした点をしっかりと子どもさんたちに分かってもらえるように。これはもう体得ね。身につけるということだと思うんです。あとは子どもさんたちがどう応用していくのか、そうした素地を持ってもらう。これが重要だと思います。その意味でさきほど、時間軸の話が委員長さんからも出たんで、冒頭説明があったように、どうしても役所ってここに引きずられるんですが、推進期間、こうあってね、これが4年間です。だから4年間でやることを考えるのね。だが、思想の部分はそうじゃない。これからずっと今の現世で考えて、将来こうあるべきものを今、大胆に書いてみる。そこのところが重要だといったご指摘を今、いただいたところですので、その点も是非、考えていただきたいと思います。

ということで、各委員さんたちからも前向きないろんな話が出たところでもありますので、これを含めて次回また、取りまとめて、大綱へ向けて進めていければと考えております。ちなみに私が子どもの頃、言われた言葉、一点だけ。とにかく社会に人に迷惑かけるな、そんな人間になるな。これだけ言われて今になっております。まあ、迷惑かけてるのかもしれないですけどね。まあ、是非、そうした点、皆さん方にもそれぞれ、そうした思いがおりだと思えますし、教育現場の皆さん方にもそれぞれ思いがあるかと思えます。その熱き思いをどう今度は次世代に伝えていくのか。伝授していくのか。こうしたことがしやすい環境にしていくべきではないかと思えますので、こういった点、次回の中に盛り込まれますようによろしくお願い申し上げたいと思います。

それでは、各委員さん方、本当にどうも今日はありがとうございました。以上をもちまして第3回総合教育会議を閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

(司会進行)

<七條政策創造部長>

ありがとうございました。それでは、本日、ご議論いただきましたご意見を踏まえまして、大綱骨子の最終案を取りまとめて参りたいと考えております。大綱の骨子案につきましては、9月議会

において、ご報告させていただく予定としております。それではこれで第3回総合教育会議を終了いたします。どうもありがとうございました。

以 上